

平成 30 年度

大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業 報告書



川内村の「とっておき」

福島県双葉郡川内村第四行政区

上智大学 学生地域社会研究グループ

目次：

1. はじめに
 - 1-1. グループ紹介
 - 1-2. 参加経緯
 - 1-3. 調査方針

2. 川内村第四行政区の概要

3. 調査概要
 - 3-1. 1回目
 - 3-2. 2回目
 - 3-3. 3回目
 - 3-4. 4回目
 - 3-5. 5回目
 - 3-6. 6回目

4. 課題

5. 魅力・提案
 - 5-1. 提案内容

6. おわりに
7. 謝辞

1. はじめに

1-1. グループ紹介

私たち上智大学 学生地域社会研究グループは、地域社会学や生活史を専門とする上智大学総合人間科学部社会学科の植田今日子准教授の指導のもと、社会学科2年の有志5人によって構成されている。社会学科では環境社会学及び民俗学や、社会学的調査分析を学んでいる。

1-2. 参加経緯

学科で地域社会等について学んでいた折に、大学の掲示板で福島県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」を知った。そこで学生の私たちにも社会学科として得てきた手法や考え方を生かし、微力でも地域社会に学生ならではの貢献ができるのではないかと、参加を希望した。

また、地域活性化に際しては、こちら側の一方的な押し付けの考えではない、地域の方々とその地域に即応した活性化を見つけ出していきたい。そのためには、集落の方々と密にコミュニケーションを取ることが重要であり、このプロジェクトはそれを可能にしてくれると考えた。

1-3. 調査方針

私たちは地元学を軸として活動を実施した。地元学とは、「ないものねだり」をするのではなく、地元が有する本来の資源や長所に加え、客観的な視点による新たな魅力を活かした地域づくりを目指す見方である。このプロジェクトの趣旨である活性化について見つめ直してみると、それは一概に定義できない。外からの人口を増やすことを目指す地域もあれば、内部から経済の活性化を目指す地域もあるだろう。それを正確に把握するためには、現地で実情調査をした上で地元の方々から学ぶ姿勢を主とする地元学的手法が有効であると考えた。活動の中では積極的に地元住民の方にインタビューをする機会をいただいで「あるもの探し」を常に心掛けた。その魅力を再発見するためには実際に足を運び現地の風景や空気感に触れ、村民の方々との直の交流が必要不可欠である。私たちは、以上のように村の「とっておき」を丁寧に可視化していく作業を調査方針とした。

わたしの

とっておきプロジェクト

初めまして！

上智大学「学生地域社会研究グループ」です。
今回福島県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」
で川内村第4行政区とのご縁をいただき、活動させていただくことになりました。



活動内容：

- ・集落の方に自分の「とっておきの場所」「とっておきのご飯」等の写真を撮っていただく。
- ・私たち学生が気が付いた「とっておき」の写真も撮る。

目的：

「とっておき」の写真を撮ることで、普段は意識しない村の魅力を再発見し、それらをインターネットや紙媒体を通して、外部へ発信する。

活動予定日：

- 10月6日・7日
- 11月3日・4日
- 11月10日・11日
- 12月末定

ご協力よろしくお願いいたします！

指導教員：植田今日子、
曾我穂衣・園田ひとみ・田島佳苗・橋本瑞希・横田明里

このチラシを作成し、あらかじめ村民の方々に配布していただいた。

2. 川内村第四行政区の概要

川内村は福島県の浜通りに含まれ平成30年9月1日時点で住基世帯は1,262世帯である。しかし、村内生活世帯数は917世帯となり、高齢者率は約38%にのぼる。また、村は8つの行政区に分かれており、下図の平伏沼周辺が第四行政区である。



出典：川内村 HP

東日本大震災以降、川内村は奇跡の村と呼ばれている。川内村は全域が福島第一原発から30キロ圏内に含まれていたため、全村避難が余儀なくされた。しかし、実際は地理的条件により避難先の郡山等より放射線量が低かったのである。そこで役場の機能を川内村に迅速に戻すべく、村民の方々が尽力し、約1年後に帰村宣言が出された。現在では商業施設やレジャー施設の運営が再開されている。また、企業誘致や新たな農業・産業としてワイン造りの取り組みもなされている。

3. 調査概要

先述したように、できるだけ現地に赴き村民の方々から学びながら提案させていただく方向性を決めていきたいという思いのもと、2018年8月から12月にかけて計6回川内村を訪問した。

3-1. 1回目（8月11日）

- ・ 第四行政区代理区長秋元様と今後の活動についての打ち合わせ

3-2. 2回目（9月19～20日）

- ・川内村役場で復興に関する諸事情の聞き取り調査
- ・認定こども園かわうち保育園の先生方にインタビューを実施し、若い世代の方々のお話を聞く
- ・他、村内の見学

3-3. 3回目（10月6～7日）

- ・田んぼやライスセンターの見学



- ・婦人会の方々にご協力いただいたの郷土料理作りと食事会



- ・川内村の主産業である農業の再生を目的に建てられ、LEDでの野菜栽培に取り組んでいる植物工場「KiMiDoRi」訪問
- ・住民の方々にインタビュー
- ・他、村内の見学



3-4. 4回目（11月3～4日）

- ・ 第4回かわうち祭り
- ・ 川内村に移住されてきた方々にインタビュー
- ・ 他、村内の見学



3-5. 5回目（11月10～11日）

- ・ 第四行政区区民祭への参加及びお手伝い



- ・ いわなの郷にて釣り体験、利用者や施設の方へのインタビュー



3-6. 12月23～24日

- ・ 川内盛り上げっ課主催のしめ縄作り体験に参加



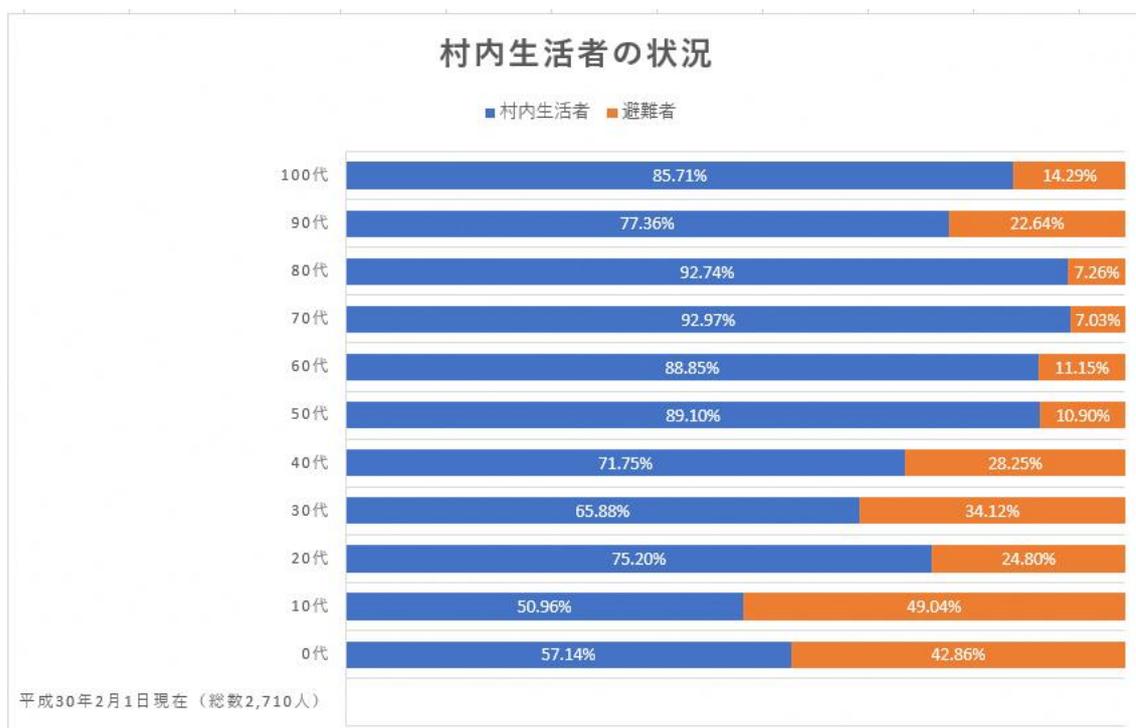
- ・ 川内村に移住し花屋を営む福塚様にインタビュー



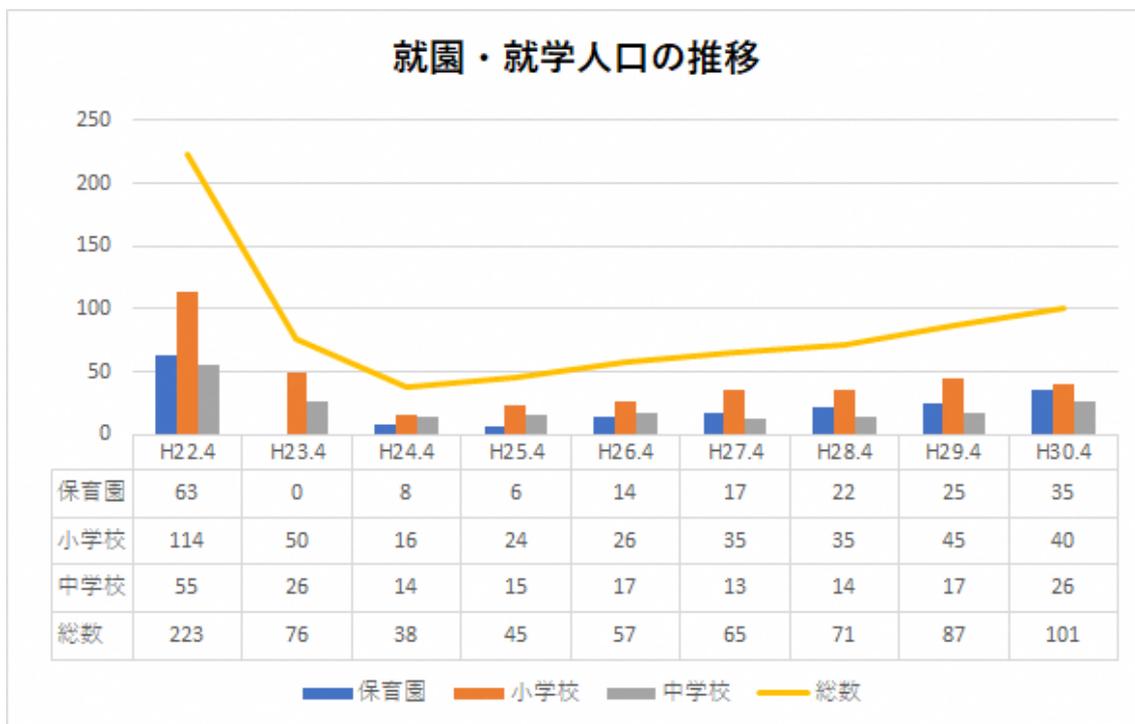
- ・ 区長、代理区長との最終打ち合わせ



4. 課題



資料 1：川内村役場で頂いた資料を基に作成



資料 2：川内村役場で頂いた資料を基に作成

村民の方々や役場でお話を伺い、川内村の課題であると考えられたのが若者の人口流出である。村内に高校がないため進学するにあたり村外に出なければならない現状に加え、資料 2 から見てとれるように、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災を境に就園・就学人口が減少していることが分かる。村民の方からのお話では、既存しない理由として、生活基盤を避難先で作り、子供も避難先で友達を作る等して避難先での生活を選択しているケースが挙げられることが分かった。資料 1 の帰村率を見ると、50 代未満の帰村率と 50 代以上の帰村率に差があることが分かる。川内村役場の算出によると、50 歳未満の帰村率が 66.04% である一方、50 歳以上の帰村率は 89.78% だそうだ。平成 30 年 7 月時点で、住基台帳に記されているのは 2,710 人だが、実際の生活者数は 2,194 人で、高齢化率は 38% とされている。第四行政区に限れば、子供がいるお宅は多くても 2、3 軒しかないそうだ。

また、若者の減少に伴う生産人口の低下は主要産業である農林畜産業の衰退や伝統芸能の担い手不足に繋がっている。農林畜産業においては、担い手の確保が目下の課題として村役場も挙げている一方で、震災以後の風評被害は未だ拭いきれず、就農意欲の低下につながっている。伝統文化としては、第四行政区には浦安の舞という伝統文化が存在するが、参加可能なのは女の子だけであるため、第四行政区だけでは足りず、他区から呼んで参加してもらったそうだ。また、区民祭が毎年開かれるが、昔は演奏されていた太鼓や横

笛を自分たちが参加した今年度久しぶりに倉庫から出していただき、区民の方々と踊らせていただいた。高齢化が進み、太鼓を叩くことができる人がいなくなってしまったため倉庫に片されていた。

そこで、川内村に必要とされるのが、若い世代の流入であると考えた。自分たちは交流人口という概念と関係人口という概念をはっきりと別物として扱った上で、交流人口をきっかけに最終的に目指すのは関係人口の増幅であると考えた。なぜならば、観光などによってもたらされる一度きりの関係性ではなく、永続的に繋がってられる関係性の構築が必要であると考えたからだ。

5. 魅力・提案

自分たちが立てた調査方針である地元学を活かした「あるもの探し」を行うことで見えた、川内村第四行政区を中心とした村の魅力を挙げるときりがない。しかし、やはり人の温かさや自然豊かな風景は川内村の大きな財産である。

例えば、初対面の私たちの調査に積極的に第四行政区全体として関わってくださることは都会では珍しい。実際に村に訪れたからこそ、都会とは違う人の温かさに触れることができた。ここを一つのアピールポイントとして提案に盛り込みたい。

また、8月から調査に入ることで、四季折々の川内村を楽しむことができた。もちろん多くの集落がそれらを有しているが、それぞれの自然や人柄はその土地こそその資源である。その点を踏まえ川内村ならではの魅力をいかに提案できるかがポイントである。

また、特産品としては、そばといわなが代表的なものとして挙げられる。そばは川内村祭りでの販売や、「そば道場」という施設ではそば打ち体験をすることが可能だ。加えて、そば粉に加工しそれを利用することにより、新商品開発の可能性も考えられる。いわなの郷で行った聞き取りでは、リピーター客も多く、いわなが活性化につながっていることが分かった。これらの場所を紹介し、人を呼び込むことで私たちもその一助となれればと思う。

これらの地元の方々と再発見した魅力をもとに、活性化案を考えた。関係人口を増やすことを最終的な目標として掲げ、多くの方々に知ってもらう機会の創出が第一歩である。現状学生の自分たちの行い得ることを考えた結果、川内村の魅力を発信する媒体として関わっていく必要性を感じた。魅力を知ることに関心に繋がり、足を運ぶ「きっかけ」ができる。関心を持ってもらい、川内村を一つの選択肢として加えること、それを目指し、私たちは「きっかけ作り」をキーワードに三つの活性化案を三本柱として打ち立てた。



千翁川



天山文庫



いわなの郷



郷土料理

5-1. 提案内容

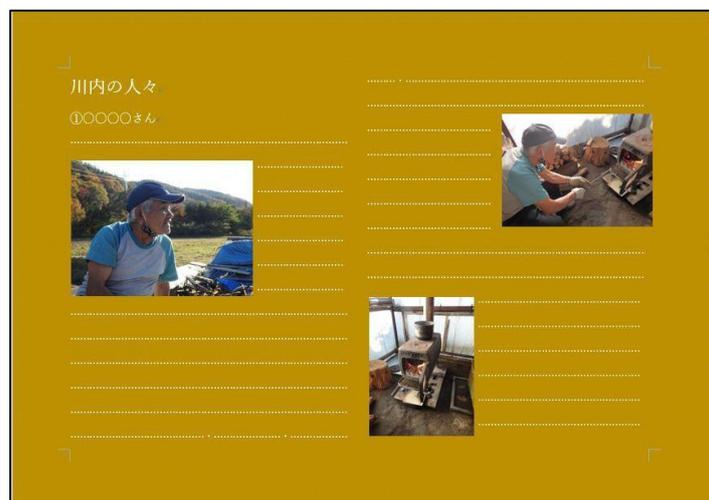
活性化案として大事であるのは、いかに自分たちの持ち得る資源を最大限に活用し、同時に目的である「多くの人々に川内村を知らせるか」という二点を両立するか、であると考えた。そのため、活性化案を考えるにあたり、自分たちの資源を見つめなおした上で、三つの案を提案したい。

・一つ目は SNS(Social Networking Service)を使い川内村の魅力を発信することだ。役場の方からお話を伺った結果、情報発信力に課題を感じていらっしやったので、そこに尽力したいと考えた。媒体としてはインスタグラムが最も有効であると考えた。理由としては第一に多くの若者はもちろんのこと幅広い年齢層が利用しており、また国境を越えて人々につながる容易であること。第二に、ハッシュタグ機能を活用することで簡単に自分たちが載せた写真にヒットすることが可能であること。第三に、写真を主体とした媒体であることが挙げられる。川内村の魅力溢れる景色を人々に直接的に訴えかけられるのは写真や動画であると感じ、また文章よりも視覚的情報の方がインパクトがあるため、写真を主体としているインスタグラムを利用することにした。昨年11月に開設し (@kawauchi_4)、現時点では川内村第四行政区を中心とした川内村の景色をあげている。その結果、福島県にゆかりのある方、自然に関心のある方に加え、英語のハッシュタグをつけたり説明文を書いたりすることにより、海外の方からも「いいね」やコメントをいただいている。今後は風景だけではなく、許可を得た上で、最大の魅力である温かな川内村の方々のお写真を伺ったお話とともに投稿させていただきたいと考えている。また、更にフォロワーの拡大をすることで、川内村の魅力を発信できればと考えている。

・二つ目は冊子の作成である。これは川内村の風景だけではなく、川内村の村民の方々や郷土料理を紙媒体としてまとめたものだ。「とっておき」をテーマとして調査に入ったため、この冊子でも「とっておき」というキーワードを軸に作成していく予定である。インスタグラムだけではなく紙媒体にしようと考えたのは、地元の方々にも手に取ってもらいやすく、他所からの視点に基づいて発見された魅力を知ること、自分の村の魅力を再発見してほしいと考えたからだ。「なにもない」のではなく、「これだけある」という意



識を持つことで、村の魅力に自信をもってもらうことが、他所から人を呼び込むときに大事だ。そのため、出来上がった冊子は東京のアンテナショップや大学構内だけでなく、川内村村内の温泉施設やレジャー施設にも置くことを検討している。



・三つ目は大学構内における特産品の販売だ。川内村の課題の一つとして挙げられていたのが震災以後の風評被害であったため、特産品を販売することで川内村を知ってもらうだけでなく、安全性を証明することができる。また、川内村の商品として販売することでブランド力の向上にもつながると考えている。特産品を販売する際は、パンフレットやポップのようなものを添付して販売しようと思っている。短い文章であれば、あまり興味がない人でも読みやすく、また留学生が多い自分たちの大学だからこそ英語バージョンも作成し販売することで日本に興味がある外国人にも川内村の魅力を伝えることができると考えている。特産品として販売する商品は現在川内村の村民の方々と大学で販売できる時期を調整中であるが、特産品の一つであるそばを利用した商品を販売できればと思っている。また、ブドウも特産品の一つとして確立している段階であるため、そば粉とブドウを掛け合わせた商品の開発も進めていき、それを販売することも検討している。

これら3つの案を通して、川内村の魅力を幅広い世代や国境を越えて伝えることができればと思っている。来年度はさらに案を深め実現可能にし、実施していく段階までもっていくことを目標に活動していきたい。

6. おわりに

調査に入る前は川内村について何も知らなかったが、調査に入り村民の方々と出会い交流を深めていく中で、自分たちのように知るきっかけのなかった人たちに是非知ってもらいたいという気持ちが強くなった。

また、社会的にも少子高齢化が進行する現在において、若い世代として自分たちが何にどう貢献できるかを再度深く考える機会となった。性急に事を進めるのではなく本プロジェクトのように、現地の方々と密に接してその声に耳を傾ける姿勢がその地域に即した持続可能な地域活性の第一歩である。今後もそのことを心に留め、活動を継続していきたい。

7. 謝辞

今回の調査を行うにあたって、川内村第四行政区の三瓶区長をはじめとし、川内村第四行政区及び村民の皆さまには調査への協力を快く引き受けて下さったこと大変感謝しております。また、秋元ご夫妻は調査のため川内村に訪問する都度、家族のように迎えて下さったこと、心より御礼申し上げます。調査という枠を超えて川内村が大好きになりました。

三瓶様をはじめとする福島県庁の皆様、川内村役場の皆様にも調査に快く協力していただき、大変感謝しております。

たくさんの方々にお世話になり、私たちはこのプロジェクトを行うことができました。この場を借りて御礼申し上げます。有り難うございました。

上智大学学生地域社会研究グループ一同